

シネマ通信

第18号(2025年7月6日)



カーテンコールの灯

Ghostlight

監督:ケリー・オサリヴァン、アレックス・トンプソン

脚本:ケリー・オサリヴァン

出演:ダン/キース・カプフェラー

ダンの妻/タラ・マレン

ダンの娘/キャサリン・マレン・カプフェラー

アメリカの郊外。建設作業員のダンは、家族に起きた悲劇から立ち直れずにいた。仲睦まじかった妻や娘との心もすれ違いがちで、ギクシヤクとした毎日を送っていた。

そんなある日、突然、見知らぬ女性から声をかけられ、強引にアマチュア劇団の公演「ロミオとジュリエット」に参加することになる。何の経験もなく、全く興味もなかったダンだが、これまで出逢ったことのない個性豊かな団員たちとのふれあいに次第に喜びを見だし、劇団が彼の新しい居場所となっていく。

ところが全く予期せぬ変更で、ロミオ役に大抜擢されることになり家族や仲間の期待を背負って舞台に立つが…

第18回鑑賞作品

バラバラになりかけた
3人の家族
不器用な父に偶然訪れた
新しい世界。そして…

あたし



About Them

「カーテンコールの灯」の監督・脚本のケリー・オサリヴァンは、日本でも小ヒットとなった「セント・フランシス」の主演・脚本で、一躍注目を集めた新進俳優・監督・脚本家です。

「セント・フランシス」は、大学を中退し、目標を見いだせない30代の女性が、レズビアンカップルの娘の夏の子守に雇われたことで、それぞれの運命が少しずつ好転するという、心温まる物語。この映画の監督アレックス・トンプソンが、彼女の実生活のパートナーであり、本作では共同監督を務めています。この2作品に共通するのが、人生に戸惑いながら生きる市井の人々への、制作者の優しいまなざし。カッコ悪くても真摯に生きる人々へのエール！がテーマといえるでしょう。

主人公のダンは、シカゴを拠点に活躍するキース・カプフェラー。その妻と娘を演じるのは実の妻と娘という、ぬくもり感あふれる珠玉の小品。いつも何かに追い立てられているような現代生活の中にも、人々とのふれあいが生み出す“愛”が、きっと、潜んでいるのです。



About Something

ブルガリアの花祭りの写真を見て、ふと、行きたくなってから早や？年。この5月末に、遂にブルガリア・ルーマニアのツアーに参加することができました。バラの谷と呼ばれる地方の、小さな村の花祭りは、予想通りあまり観光化されていない、村総出・家族総出の手づくりイベント。二十歳というバラのクイーンの美しさに見惚れた後に、バラジャムを買った露店で農家の娘さんの美しさに、さらにビックリ。ダンスを踊った子供たちも、皆、愛らしく、ただもう、眼福です。ルーマニアで一番印象に残ったのは「国民の館」。チャウシェスク(共産主義時代の独裁者)により、世界一の共産党本部を造るというかけ声で施工された超巨大な建造物です。ところが7割まで完成された時点で施主が処刑されて中断。米国のペンタゴンに次ぎ世界で二番目に大きいというこの置き土産をどうするか？全国民を巻き込んでの激論の末、工事は再開され、ほぼ完成された現在は、国会議事堂や美術館として使われています。エントランスの豪華さには、クレムリンを凌駕したい！という独裁者の執念が今も漂います。皮肉なことに、このツアーの前の見学地が、当時の共産党本部。「1989年12月22日、チャウシェスクはあのバルコニーで演説を試みましたが失敗し、あの屋上からヘリコプターで脱出しました。しかし、1時間後には軍隊に捕らえられ、5分間の裁判の後に妻と共に銃殺されました」というガイドの説明が、まだ耳に残ります。独裁者の栄光と末路を、ふたコマ漫画で見たような強烈な体験でした。

両国とも農業国で、美しい麦畑が延々と続きます。街に入ってもビルは少なく、古い木造家屋が主流です。ルーマニアでは、アチコチで工場の廃屋が目につきました。チャウシェスクの下、工業化を目指し工場が乱立されましたが彼の死後は後継者も無く、そのまま放置されているものが多いそうです。AI産業は進んでいるとのことでしたが豊かな農産物に恵まれた両国の人々は、工業化など望んでいないようです。映画産業も無いかもと思い、帰国後調べてみたら、ちゃんと古くから存在していたようです。しかし日本に入ってくる映画は少なく、作品リストからピンときたのは、両国合作の「おんどのりの鳴く前に」のみ。何も起こったことのない平和な村で、ある日、死体が発見されて…というこの映画は、予告編を見て、見たいと思いながら見逃していた作品です。劇場公開はもう終わっていますが、この際、何とかして見ねばなりません。楽しいミッションが、一つできました。